

日光の山

中村嘉津

よき人のうす絹かつく如くにも白雲かゝる日光の山。  
びち／＼と靴にくたくる檜の實の音も嬉しき朝の森かな。  
かはきたる咽喉をうるほす一房の山葡萄の實尊かりけり。  
せまりくる山の高さにをのゝきて戦場ヶ原にわれたてゐるかも。  
かの山にかゝりし雲の深ければ我かふるさとは曇りてあるらし。  
山とよむ瀧の響にひら／＼と秋の木の葉のたえず散るかも。  
木の間よりやう／＼廣く見えてゆく湖の嬉しさ湖の明るさ。  
やう／＼に宿の軒燈みえし時心にはかにいさみけるかな。  
やゝぬるき湯槽の中に安らげく疲れし身をはひたす嬉しさ。

日光にゆきける時

文科二、三 安吉ます

あさ汽車の窓すれ／＼に名も知らぬ秋の草々可愛くも咲く。  
はら／＼と風なきに散る落葉をはあかすなめて戀ふる故里。  
ひや／＼けき秋の霜ふみのほりゆく白樺たつ戦場ヶ原。  
ほろ／＼と檜の實おつる山道に幼な遊びの日を思ひ出つ。  
薄墨の雲のちきれが流れゆく山あひさひし旅の夕暮。  
汽車の窓夕さひ色の身にしみて野火の煙に旅心しぬ。

わか／＼

文科二、四 梶原千代子

わか／＼ろしつけかりけりそのあさはかせのすさふにかかはりもなく。  
さひしさはうれしけれどもいくつかのともしてけりをみななるまゝ。  
あいらしきなそのことくにおもはれててにとりてみぬことのつめばこ。